

整理作業でみつけた「なるほど」な情報を、一早くご紹介！

この資料「ここがみどころ、ここがツボ!!」-整理作業の最前線から「蔵出し」最新情報/File.010-

博物館には「収蔵資料整理」とよばれる、資料を世に出すにあたり基礎となり不可欠な作業（点検・ナンバリング・収納・補修など）があります。この作業では、規模の大小はあれ、日々「新（あるいは再）発見」と「感動」と「謎や問いかけ」があり興味が尽きない一方、コツコツと根気強くやるしかない地味で辛く大変な作業です。

ここでは、そんな整理作業の過程で得られた資料にまつわる「なるほど」で「ほほう」な情報をご紹介しますので、皆さんも情報を通じてこの大事な作業の「協働者」になって頂けると幸いです。

というわけで、今回皆さんにご紹介したい新（再）発見資料はコレです！

■資料名 : 原稿(手書き原稿)

■資料のひとことPR: 盟友 安井曾太郎～小宮豊隆氏の心の声を聴く

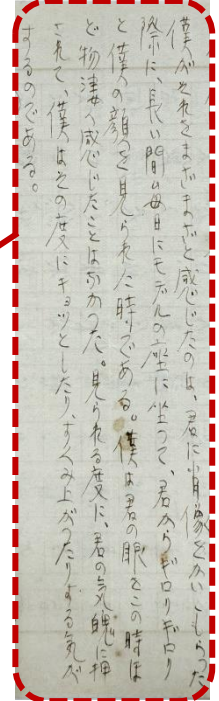
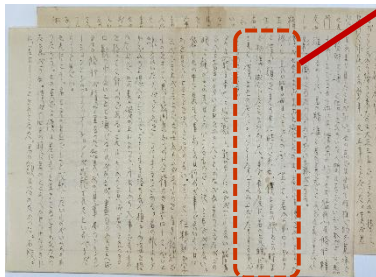
■資料写真 : ①原稿(手書き原稿) ②小宮豊隆君肖像画(安井曾太郎) ③「小宮豊隆氏肖像画」を描く安井曾太郎とポーズをとる小宮豊隆(神奈川県箱根のアトリエで)



左: ①小宮豊隆君肖像画(安井曾太郎)

右上: ②「小宮豊隆氏肖像画」を描く安井曾太郎とポーズをとる小宮豊隆(神奈川県箱根のアトリエで)

右横: ③原稿(手書き原稿)と一部拡大写真



■資料データ File

- ・形状/材質/法量 使用済み原稿用紙裏面 自筆
ペン書き原稿 2枚タテ 18.6×ヨコ 26.0
- ・制作年代 昭和30年
- ・注目ポイント 安井曾太郎への想いを知る

■資料メモ

当館では昭和24年9月ごろ安井曾太郎によって描かれた小宮豊隆氏の肖像画を所蔵しています(写真①)。安井は、フランスでセザンヌや印象派の影響を受け、帰国後、近代写実画を確立した日本を代表する洋画家の一人で、梅原龍三郎とともに「昭和洋画界の双璧」と呼ばれました。昭和22年～31年まで「文藝春秋」の表紙絵を描いた人気画家でした。

今回はその安井曾太郎と小宮豊隆とのかかわりに関する新たな資料をご紹介します。

「君がフランスから帰って来たのは大正3年で、フランスから持って帰った作品が三越で展示されたのはその翌年、1915年のことだった。僕が君に会ったのは、その展示会が開かれた年だったと思ふ。それから今年まで丁度40年である」と書き始められた小宮の手書き原稿です(写真③)。この資料は「講演のノオト」と筆で書かれた茶封筒の中に「安井のこと」とまとめて入っており、使用済み原稿用紙の再利用なのか、裏の白紙の部分に几帳面な小宮の字で丁寧に書かれていました。

小宮は安井の芸術に対し、「鶏の毛の先ほどの小さな事でも見逃さない精刻な写生をして後、余計なものを削ぎ落し必要な線のみを残して描くリアリズム」と評し、「見事な集中力と単純化とが成就したもの」と激賞します。そして、安井の眼差しの鋭さを、肖像を描いてもらった際に小宮はまざまざと感じたといいます。「君からギロリギロリと僕の顔を見られたときである。僕は君の眼をこのときほど物凄く感じたことはなかった。見られるたびに、君の気魄に押されて、僕はギョッとしたり、すくみ上がったたりする」と記されていて、写真②の小宮豊隆と安井曾太郎とが向き合う時の、空間に漂うピンと張った空気感まで伝わってくる記述です。資料は時を越えて、その時の1コマを今の私たちに垣間見せてくれます。

そして、「僕は君の畫(画)を40年愛しつづけた。さういふ友達を失ったことは、僕にとってかけがえのないものをなくしてしまった気持ちがする」と綴られているので、これは安井が昭和30年に亡くなってすぐに書かれたものと思われます。

■整理担当者のつばやき

安井曾太郎との関係は書籍などにも出ていますが、本人の筆跡で書かれた実物にはやはり想いが宿ります。この資料に書かれている内容は「小宮豊隆君肖像画」に奥行をもたらします。安井曾太郎がキャンバスにぐいっと引いた線の筆使いまで見つめ直しました。

注) 1. 本文の情報は令和6年11月現在のものです。その後の究明や新資料の発見により見解が改められることもありますので含みおき下さい。

2. 本書に掲載の写真や文章を無断で転載することは禁じられています。